中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1478

「無我の教えは、別の側面から云うと」他の身になって考えることであり、同情であり、共感的であり、愛情であるといえる。仏教では、これを「慈悲」と呼んでいる。

（中村元）

＜解説＞無我の教え、その実践とは、自我のとらわれを取り払い、他の人とのつながりを見据えて、そこから生まれる、同情、共感、愛情なのである。その実践こそ「慈悲」、つまり「慈しみの心」といえるだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.1 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1479

施しと、親愛のこもったことばと、「他を」利する行いと、あれこれの事柄について適切に公平さを保つこと、これが世間における愛護である。

（釈迦）

＜解説＞これらは、四つの愛護の基礎であり、「四摂事」（人々をおさめて守る四つのしかた、四つの包容の態度）という。中村元先生はそれらを、「簡単な表現としては、気前よさ、好意、協力、奉仕」と説明する。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.3 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1480

戒めをまもる人は、自ら制するために、多くの友を得る。しかるに戒めを犯す人は、悪事を行って、多くの友から疎んぜられる。

（『テーラガーター』）

＜解説＞この他に、戒めを守ることは、「名声と名誉と称賛を得る」「悪をよせつけないための境界である」「心の輝き」「無比の力、最上の武器」「最上の旅路の糧、最良の案内人である」などと、そのさまざまなよき点が述べられる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.4 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1481

恩を知り恩に報いる堅固な人、よき友であり義理厚い人、苦しむ者によくつくす人、このようなものをりっぱな人と呼ぶ。

（『ジャータカ』）

＜解説＞人は基本的に孤独であるが、孤立しては存在できない。であるからこそ、他の人からの恩を受けて生きている。それを自覚する必要がある。この文章は、「りっぱな人とはどのような人であるか」に対する答えとして述べられている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.5 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1482

知りたる道に迷うというは即ち此事なり。（『正信無常観』）

＜解説＞ものごとはすべて無常である。ことばでは人は「夢の世」であるとか、「幻の身」であるとか言っている。それは、昔も今も同じである。この道理は理解しているつもりであるが、いざ現実に直面した時には焦り悲しみ、悩み苦しむ。それは、まさしく、知りたる道に迷うことではないだろうか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.6 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1483

尊師はかつてこの四つの包容の態度を説かれましたが、わたしはそれによって多くの仲間を統率するのです。（仏弟子・ハッタカ）

＜解説＞ハッタカという長者がいた。釈迦は彼に「あなたの仲間は大勢いるが、いかに多くの人を統率しているのか」と聞く。引用の文章はそれに対する答え。つまり「施与、親愛なることば、人のためにつくす、協同すること」の四つ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.7 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1484

その灯は四つの大海の水を注いでも、嵐の烈風をもってしても、消すことは出来ない。そのわけは、広く多くの人を救おうとした大心を起こした人が布施したものだから。（『賢愚経』）

＜解説＞貧しいながら苦労して灯火を施した女性がいた。一つしか買うことができなかったが、その灯火に込められた気持ちは強い力を発した。多くの人を救おうというすぐれた願いが根底にあるから。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.8 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1485

或いは生まれながらにして之を知り、或いは学んで之を知り、或いは困しんで之を知る。其の之を知るに及びては一なり。（『礼記』）

＜解説＞教えを知るために、能力、素質、性格などの立場によって、早い遅いはある。しかし、「知る」（体得する）ことができれば、どのような場合でも同じ。道筋に違いはあるだろうが、正しい方向へ進み続ければ達成できるはずだ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.9 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1486

一大蔵経、皆、これ所依なり。奪ってこれを論ぜば、一言の所依なきなり。（栄西）

＜解説＞仏の説かれたすべての経典（大蔵経）が、すべてよりどころなのである。しかし、経典によりながらも（経典は必要であるが）、その経典自体にこだわり、博識であるだけで、実践し説き示す本意を体得しなければ不十分、よりどころにならない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.10 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1487

「理想の幸せ」についての考えが、かえって私たちを捉え縛ってしまいます。それがただの固定観念やイメージでしかないことを私たちは忘れてしまうのです。（ティク・ナット・ハン）

＜解説＞他者と比べて作り上げた「幸せの形」、時にはそれが心を不自由にし、正しくありのままに見る力を奪っていないだろうか。その縛りゆえに、近くにあるほんとうの幸せを見逃していないだろうか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1488

牛は水を飲んで乳とし、蛇は水を飲んで毒とする。真理は本来、同一の味を持つものであるが、真理を正しくあるいは邪に実践するかしないかは、ひとえに人による。（『沙石集』）

＜解説＞真実の世界、それを毒にするか乳にするかは、人それぞれの心による。水はすでに用意されている。真理に気づき知恵を発動させる機縁はそなわっている。実践してあらわにできるかは人による。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.12 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1489

遠く隔たって住んでいても、心が通っていれば、二人は互いに離れずに一緒に住んでいることになる。心に隔たりあれば、近くにいても互いに離れて住んでいることになる。（『ジャータカ』）

＜解説＞共に理解し信じる真実があれば、心は同じ方向を向いている。たとえ、互いに遠くにいても、2人はこの点でつながっており、一緒に住んでいるのと同じだという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.13 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1490

私は、他人の苦しみをなくさなければならない。なんとなれば、それは苦しみであるからである。それは、私自身の苦しみをなくさねばならぬのと同様である。

（『入菩提行論』）

＜解説＞自分の身に引き比べて他人を見ることができる。自我へのこだわりの壁がないから、他人の苦しみは自己の苦しみになる。なんとかしなくてはという思い、そこに慈しみのこころが生まれる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1491

中傷することばを語るものがいる。離反を起こさせ、不和を愛し、不和を好み、不和を喜び、不和を促すことばを語る。

（釈迦）

＜解説＞言葉の影響力は非常に大きい。慈悲ある言葉は世界をよき方向へと変える力がある。しかし、中傷する言葉は逆。不和の原因となり、仲たがいを生じさせ、それまで仲がよかった人たちを離反させてしまうこともある。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.15 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1492

つまらぬ冗舌を語るものがいる。時期を考慮せず、話すべき理由なしに話し、際限なく話し、利益のない話をする。

（釈迦）

＜解説＞言葉は影響力が強いだけに、用い方についての教えも多い。時期を考えず、理由なしに、際限なく、利益のない話をする。聞く側は大変だ。その根底には自分勝手な見方と態度が潜んでいるのだろう。油断すると誰もがもつ。十分注意したいところである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.16 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1493

二つの縁から正しい見解は生じる。他の「人からの教えの」声と十分な考察（如理作意）とである。この二つの縁から正しい見解は生じる。

（釈迦）

＜解説＞正しい見解には、教えを聞いて、それをよりどころとした十分な考察が必要。そうすると正しい実践となっていく。「如理作意」と訳されるが、真理から流れ出た教えをもとに、よく検討し、それが示す道を追体験すること。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.17 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1494

我身は生死無常の浮世に在りといえども、心は高く真如の都に遊びて煩悩の塵垢に汚されず。

（『正信無常観』）

＜解説＞自ら安楽の境地に達した理想的な状態について描写している。あくまでも、生と死がある無常の世界にいるのであるが、そこで汚されることなく安楽の境地を維持しながら、他の人にも教え、実践をすすめる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.18 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1495

不知足の者は、富めりと雖も而も貧し。

（『仏遺教経』）

＜解説＞足ることを知らないものは、富があったとしても、実は貧しいのとおなじである。むさぼりの心は、「もっともっと」と、満足することなく求めてしまう。たとえば、お金の雨が降ったとしても、決して満足しないようなものだと例えている。安穏の境地を得るには知足の心が必要となる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.19 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1496

不知足の者は、常に五欲の為に牽かれて、知足の者の憐愍する所と為る。

（『仏遺教経』）

＜解説＞足ることを知らない人は、いつも五欲、つまり、眼、耳、鼻、舌、身（触覚）の五つの感覚器官で刺激を受けては、満足せずに求め続ける。それは物事に振り回されて、自由がないのと同じ。知足の人は、その悲惨さを知っているから憐れみをもってみる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.20 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1497

物に定まれる性なし。人、何ぞ常に悪ならん。縁に遭うときはすなわち庸愚も大道を乞い願う。

（空海）

＜解説＞変化しない性質のものはない。縁って起こっている。どうして人は常に悪人であり続けるであろうか。悪人であろうと、その人が縁に巡り合い、その縁を逃すことなければ、平凡で愚か（庸愚）であっても大いなる道を願い求めるものである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.21 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1498

一は恭敬供養し、二は瞋り罵り打ち害す。尓の時に菩薩は、其の心能く忍び、恭敬する衆生を愛さず、悪を加うる衆生を瞋らず。

（『大智度論』）

＜解説＞ほめたたえてくれる人もいるし、怒りをぶつけて罵ってくる人もいる。ここでは、怒りに対しては怒り返さず、称賛に対してもおごる心（愛着）を起こさないのが、本当の忍辱（耐え忍ぶこと）であるという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.22 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1499

わたしが、悪口を言われても、それだからとてくよくよせず、また褒めたたえられても、それだからとてよろこぶことがないようになるのは、そもそも、いつの日のことであろうか。

（『テーラガーター』）

＜解説＞他人からのいろいろな評判に耐え忍び、安定した心で過ごしたい。しかし、簡単ではない。この修行者はそう感じながらも、前向きに少しでも理想に近づこうとする努力を続ける。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.23 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1500

兄弟に対して愛を語ってはなりません。愛しなさい。教義や宗教を論じてはなりません。宗教は一つしかありません。すべての川は海に行きます。進みなさい。そして他のものも進ませなさい。

（ラーマクリシュナ）

＜解説＞大切なのは教えの議論ではなく、こころから人を愛すること。なお、ここでいう「宗教」とは、既成の宗教それぞれでなく、その奥にある本質（真理）という意味であろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.24 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1501

心がその〔煩悩の〕まとわりにまとわりつかれると、わたしはあるがままに知ることができず、見ることができなくなるであろう。

（釈迦）

＜解説＞たとえば心が怒りに支配されていると、ありのままの認識ができない。見落とし、脚色し、見たいように見る。自分の認識と現実との間に矛盾が生じ苦しみとなる。煩悩を知り、滅すための正しい実践が求められる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.25 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1502

無明長夜の燈炬なり　智眼暗しとかなしむな。

（親鸞）

＜解説＞現実にはさまざまな問題が生じ悲惨な出来事も多い。頼れるものはないのか。中村元先生は「温かいこころ」がともしびになると述べ、引用の言葉を紹介している。長い無明の闇の中でも、仏の教えが照らしている。智恵の眼がなく迷いから抜け出せないと悲しんではいけない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.26 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1503

火は「わたしは愚人を焼いてやろう」と考えはしない。愚人がみずから燃える火に触れて焼かれるのである。

（仏弟子・モッガラーナ）

＜解説＞私たちは、欲望を誤ってはたらかせる結果、迷い苦しむことになる。そして、その原因を対象物や相手のせいにしてしまいがちだ。しかし、原因は自分の側にないか。燃える火に自分から飛び込んでいないだろうか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.27 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1504

何度も顧みて、身体によって行為し、言葉によって行為し、心によって行為をしなくてはならない。

（釈迦）

＜解説＞行為は人をつくっていく。だから、鏡で自らを見るように顧みるべきだ。自他を損ない、苦しみをもたらさないか。それがよくない行為なら、可能なかぎりやめ、中止し、賢者たちにみずから告白して将来の防御とするのがよい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.28 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1505

私たちは何度も顧みて身体による行為を浄化しよう、言葉による行為を浄化しよう、心による行為を浄化しよう、と学ぶべきである。

（釈迦）

＜解説＞行為は結果を蓄積していく。それが習慣となり、性格となり、その人を形成する。だから、注意を怠らず顧みて、浄化することが大切。絶えずなされるよき行為は人を浄化し、必ず、人を安楽へと導くだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.29 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1506

失敗を気にかけるな。失敗はまったく自然であり、失敗は人生の美である。理想を千回たもて。もしもあなたが千回失敗するならば、その上にもう一度余分に試みよ。

（ヴィヴェーカーナンダ）

＜解説＞失敗しない人はいない。活動に失敗はつきもの。失敗をさらなる試みに変えたい。煩悩もつ人間である。悲観的にならず、くさらず、理想を捨てず、たとえ千回失敗しても、それでも試みよという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.30 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1507

ただ「食物」「食物」というのと、食物を食べることとのあいだには、途方もない相違がある。「水」「水」というのと、それを飲むこととのあいだも同様である。

（ヴィヴェーカーナンダ）

＜解説＞行動し、活動することが何より大事。強いメッセージが含まれている。食物は食べ、水は飲み、教えは学んだうえで、さらに実践しなくてはならない。自分のものとして体得すべきである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.1.31 中村元記念館協力